

# 「人体標本を用いた解剖学実習」についての調査報告（2024年度）

小川麻里子, 関口賢人, 成昌燮, 志茂聡, 坂本宏史

健康科学大学 健康科学部 リハビリテーション学科

Report on the Anatomy Lab Practicum Using Human Cadavers in 2024

OGAWA Mariko, SEKIGUCHI Yoshihito, SEI Shosho,  
SHIMO Satoshi, SAKAMOTO Hiroshi

## 要 旨

2025年3月に開催された健康科学大学（以下、本学）主催の「2024年度 医療専門家のための人体解剖学講習会」（以下、講習会）の参加者に対して、属性（職種・臨床経験年数・担当患者数・講習会参加経験数）、講習会の必要度・達成度・指導方法およびプログラムへの満足度、改善すべき点などを調べる質問紙調査を実施した。また、同時期に開催された「人体解剖見学実習」（以下、見学実習）に参加した本学健康科学部リハビリテーション学科（作業療法学コース、理学療法学コース）と看護学部看護学科の学生を対象に、質問紙調査を実施した。

「講習会」について、臨床経験の長短にかかわらず概ね満足を得られていることが分かった。また、「見学実習」は、参加者が解剖学の知識を確認する機会であり、教科書や模型では学べない人体構造の個体差について気づく機会であった。

**キーワード：**人体解剖実習, コメディカル, 臨床経験, 解剖学の必要性

## I. はじめに

健康科学大学（以下、本学）では、山梨大学医学部の協力を受け、人体標本を用いた解剖学実習を実施している。これは本学の卒業研修プログラムにも位置付けられ、医療専門家となった卒業生等を対象に「医療専門家のための人体解剖学講習会」（以下、講習会）として年1回開催されている<sup>4), 5), 6), 7)</sup>。この講習会は卒業生に生涯学習（リカレント教育）の場を提供し、診療に従事する中で生じた解剖学的な疑問などを検討する機会となっている。この報告では、2024年度（2025年3月開催）講習会終了後に実施した質問紙調査を集計し、今後の講習会をより良いものにするための材料を提

供したい。

一方、本学では健康科学部・看護学部開設以来、解剖学の講義・実習終了後の学生（1年次）を対象とする人体解剖見学実習（以下、見学実習）を実施している。上述の「講習会」とは異なり、参加者全員に引率教員が器官・臓器について、専門領域ごとに要点の解説を実施後、小グループに分かれて実習を進めている<sup>4), 5), 9), 10)</sup>。ここでは、2024年度見学実習参加学生を対象に行った質問紙調査をまとめ、見学実習に対する評価と今後について検討する。

## II. 方法

### 1. 講習会および見学実習の対象

### 1) 講習会

対象は、本学の卒業生を中心とした医療従事者とし、参加者のほとんどはWeb上の「健康科学大学卒業教育ホームページ」および本学教員により直接案内を受けた者であった。

### 2) 見学実習

対象は、解剖学の講義・実習を終えた本学健康科学部リハビリテーション学科(作業・理学療法学コース)1年次生70名、および看護学部看護学科1年次生48名であった。また、自己研鑽のために自ら希望し参加した上級生も数名いたが、本研究では上級生のアンケート結果は除外した。なお、リハビリテーション学科の学生は2日間に分け、1日目Aクラス35名(作業療法学コース13名、理学療法学コース22名)、2日目Bクラス35名(作業療法学コース10名、理学療法学コース25名)とした。

## 2. 講習会および見学実習のプログラム(実施内容)

### 1) 講習会プログラム

1日の講習会であり、以下の2つのコース(発展コース:参加者が自身のペースで標本観察するコース、基礎コース:人体の基本的構造の理解を目的とし、講師の説明を聞きながら実習を行うコース)を並行しての進行であった。また、各参加者の興味に応じ、両コース間の移動も可能とした。

#### 【講習会スケジュール】

9:10~10:00 挨拶,概要説明(講習会の目的,進め方,死体保存法,献体制度),実習準備

10:00~12:00 【発展コース】解剖標本観察  
【基礎コース】上・下肢の局所解剖

12:00~13:10 昼食

13:15~14:15 実習講義「心不全におけるフィジカルアセスメント」

14:15~17:00 【発展コース】解剖標本観察  
【基礎コース】体幹(背・胸・腹部)の局所解剖

17:00~ 後片付け,清掃

### 2) 見学実習プログラム

各々,1日で実施し,90分×4コマでの構成であった。概要説明(講習会の目的,進め方,死体保存法,献体制度)に続き,参加学生は,2-3名のグループを作り,教科書を参考に,以下の①~⑨について同定・観察し,メモやスケッチを残すことを課せられた。

- ① 全身のおもな筋肉の形態,位置関係,支配神経の観察:四肢および体幹で,できるだけ多くの筋肉を確認(同定)する
- ② 脊髄神経(頸神経叢,腕神経叢,腰・仙骨神経叢の構成と支配領域の観察):特に横隔神経,筋皮神経,尺骨神経,正中神経,橈骨神経,腋窩神経,長胸神経,肩甲上神経,大腿神経,閉鎖神経,上殿神経,下殿神経,坐骨神経,脛骨神経,総腓骨神経,深腓骨神経,浅腓骨神経を確認(同定)する
- ③ 頸・胸部の臓器,喉頭と気管,心臓,肺,大血管,それぞれの位置関係,縦隔の理解
- ④ 横隔膜の構造と動きの理解
- ⑤ 腹部の内臓の位置関係,腹膜の構造の理解
- ⑥ 上肢と下肢の関節の内部構造の観察
- ⑦ 自律神経系の理解:特に迷走神経,交感神経幹,腹腔神経節を同定する
- ⑧ 脳と脊髄:回,溝,葉,髄膜,脳神経・脊髄神経の根,頸膨大・腰膨大,脊髄神経節,馬尾

## 3. 質問紙調査内容

質問紙は,講習会および見学実習後に,各参加者にオンラインで配布し,記入後送信してもらった。質問紙の項目は,以下に示す。

### 1) 講習会参加者用

- ① 参加者の属性(性別・年代・職種),臨床経験・担当患者数・講習会参加経験数
- ② 選択したコース(発展コース/基礎コース)
- ③ 人体標本を用いた講習会の必要性(4段階評価および自由記述)
- ④ 本講習会での目的(選択肢)
- ⑤ 本講習会を終えての達成度(5段階評価)
- ⑥ 目的を達成できなかった場合の理由(選択肢)

- ⑦ スタッフの対応に関する満足度（5段階評価）
  - ⑧ プログラムについての満足度（5段階評価）
  - ⑨ 要望（選択肢を提示および自由記述）
- 2) 見学実習参加者
- ① 所属学科
  - ② 見学実習の必要性（実習前）（4段階評価）
  - ③ 見学実習の必要性（実習後）（4段階評価）
  - ④ 実習についての満足度（5段階評価および自由記述）
  - ⑤ 教員（指導法）への満足度（5段階評価）
  - ⑥ 実習時間について（3段階評価）
  - ⑦ 実習を通して最もよかったこと（自由記述）

#### 4. 質問紙の集計・解析について

質問紙各項目への回答結果は数的にまとめ、自由記述欄については記載された語と頻度が一目でわかるようにクラウド表示で可視化した。

##### 1) 講習会参加者

参加者の属性、職種及び臨床経験年数・延べの担当患者数・これまでのセミナー参加回数を集計した。また、前回までの報告<sup>4), 5), 6), 7)</sup>を参考に「臨床経験の少ない群：臨床経験5年未満群」, 「臨床経験の多い群：臨床経験5年以上群」で、質問紙項目への回答を検討した。

##### 2) 見学実習参加者

質問紙には所属学科がわかるように、学籍番号を記入してもらったが、個人が特定されない配慮を行ったうえで、回答を集計・検討した。

#### 5. 倫理的配慮

本研究は、健康科学大学研究倫理委員会による研究計画の承認（令和5年2月17日 承認番号：R4-010号）を得ている。研究参加者には、研究目的・方法・参加は自由意志で拒否による不利益はないこと及び個人情報保護について、口頭で説明を行ない質問紙への回答をもつての同意を得た。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 講習会の回答結果

参加者全員からアンケートの回答が得られた（回収率100%）。

##### 1) 参加者の属性

参加者は、24名中19名が男性、5名が女性であった。また年代構成は、20代が17名（70.8%）、30代が4名（16.7%）、40代が1名（4.2%）、50代が2名（8.3%）であった。

職種は、作業療法士が9名、理学療法士が15名で、本研究ではその他の職種（2名）のアンケート結果は除外した。

また、週単位の診療患者数（延べ数）は、10人以上30人未満が7名、30人以上50人未満が8名、50人以上70人未満が6名、70人以上が3名であった。

さらに本講習会への参加経験（回）数は、0回が2名、1回が7名、2回以上5回未満が8名、5回以上が7名であった。臨床経験年数は、1年未満が1名、1年以上2年未満が2名、2年以上5年未満が6名、5年以上10年未満が10名、10年以上が5名であった（図1-1）。

##### 2) 講習会で選んだコース

臨床経験年数の分布（図1-1）と前回までの報告<sup>4), 5), 6), 7)</sup>を参考に、「臨床経験の少ない群：臨床経験5年未満群（以下、5年未満群）」, 「臨床経験の多い群：臨床経験5年以上群（以下、5年以上群）」に分けて、設問②以降の回答を集計した。

<5年未満群>

午前・午後ともに発展コース 3名

（臨床経験2年以上5年未満の3名）

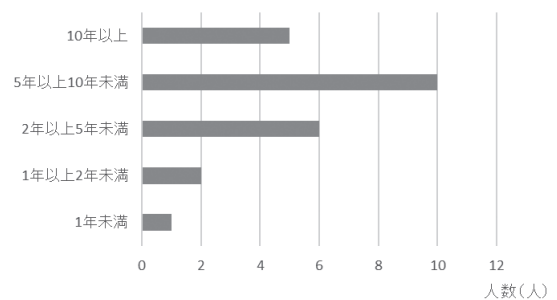


図1-1 参加者の臨床経験年数の分布

午前・午後ともに基礎コース 6名  
<5年以上群>

午前・午後ともに発展コース 9名

午前・午後ともに基礎コース 4名

(本講習会参加5回未満の4名)

午後のみ基礎コース 2名

3) 人体標本を用いた講習会の必要性

(1) このような講習会を必要と感じる時はどう  
いう時か (自由記述)

自由記述からは、図1-2のような語が抽出 (テ  
キストマイニング) され、最も多い語は「触診 (7

人, 35%)」で、「知識 (5人, 25%)」、「解剖 (4人,  
20%)」と続いた。以下に自由記述の例を示す。

- 即時効果を必要とする外来患者様への最適な治  
療に必要と感じる。筋の起始停止を理解してい  
るだけでなく、触診が必要となるためすごく学  
びの場として良かった。(5年未満群)
- 徒手療法を実施する際の触診が正しいのか確認  
できる。人体の構造が3次元でどうなっている  
か把握できる。臨床で関節を動かす際、イメー  
ジしやすい。(5年以上群)
- 解剖, 知識 (5年以上群)



図1-2 講習会の必要性—自由記述からの抽出語

(2) 今回のような人体標本を用いた講習会の必  
要性に関する4段階評価 (図1-3)

5年未満群の88%, 5年以上群の93%が「大い  
に必要」と回答した。また、「ほとんど必要とし  
ない」「あまり必要としない」と回答した参加者  
はどちらの群もいなかった。

4) 本講習会での目的 (図1-4)

5年未満群では「基本的な運動器の構造  
(100%)」が最も多く、「基本的な脈管の構造/走  
行 (77%)」と「基本的な臓器の構造/配置 (77%)」  
が次に多く、「基本的な結合組織の構造 (33%)」  
と「傷害に関連する運動器の構造 (33%)」が続

いた。5年以上群では「基本的な運動器の構造  
(86%)」と「傷害に関連する運動器の構造 (86%)」  
が最も多く、「基本的な脈管の構造/走行 (80%)」  
と「基本的な臓器の構造/配置 (80%)」が次に多  
く、「基本的な結合組織の構造 (73%)」と続いた。  
5) 本講習会の目的の達成度 (図1-5)

5年未満群では「60%以上80%未満 (6名)」  
が最も多く、「40%以上60%未満 (2名)」, 「80%  
以上 (1名)」であった。5年以上群では「80%以  
上 (9名)」が最も多く、「60%以上80%未満 (3名)」  
「40%以上60%未満 (2名)」, 「20%以上40%未  
満 (1名)」であった。

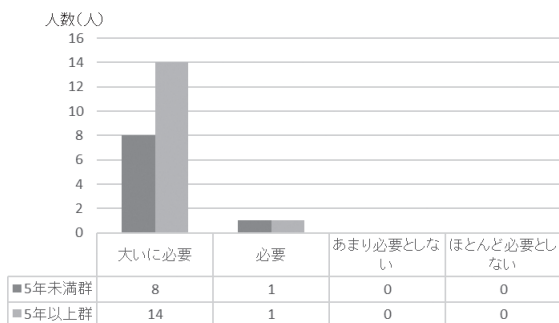


図1-3 人体標本を用いた講習会の必要性

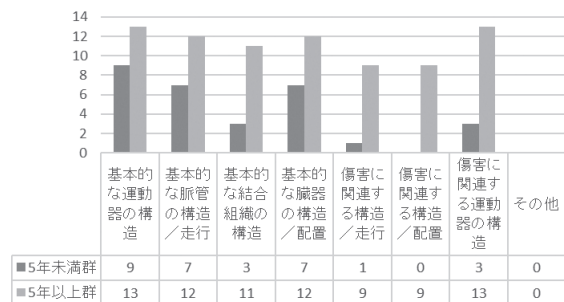


図1-4 本講習会の目的

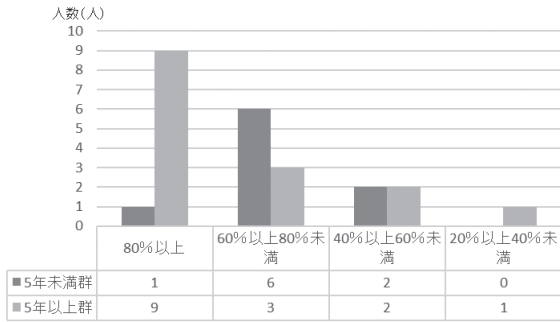


図1-5 本講習会の目的の達成度

6) 目的を達成できなかった理由 (図1-6)

両群ともに「準備すべき知識が足りなかった」が13名（5年未満群：7名，5年以上群：6名）で最も多く、「確認したい課題が多い」が9名（5年未満群：4名，5年以上群：5名）で次に多かった。「標本が，わかり難かった」は両群とも各1名であった。また、「その他」では時間が足りなかったとの理由が挙げられた。

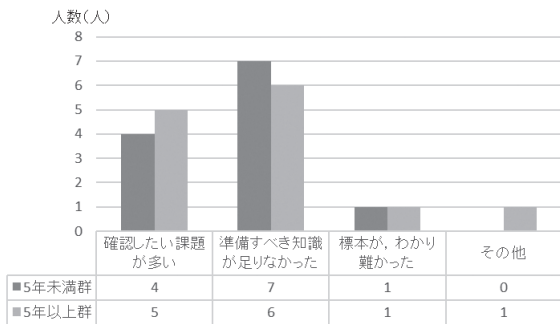


図1-6 目的を達成できなかった理由

7) スタッフの対応に関する満足度 (図1-7)

両群ともに「とても満足」が18名（5年未満群：7名，5年以上群：11名）と最も多く，次いで「満足」が4名（5年未満群：1名，5年以上群：3名）であった。「普通」と回答したのは5年以上群の1名で，「とても不満」は5年未満群の1名であった。

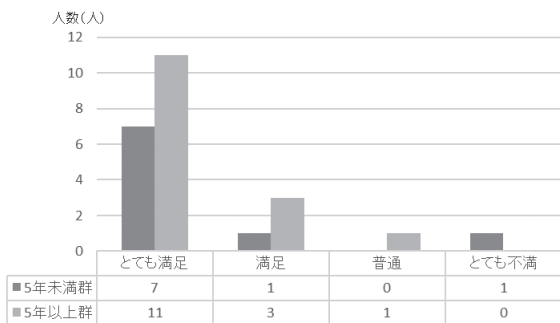


図1-7 スタッフの対応に関する満足度

8) プログラムについての満足度 (図1-8)

本講習会のプログラムについての満足度は「とても満足」が16名（5年未満群：6名，5年以上群：10名）と最も多く，「満足」は6名（5年未満群：1名，5年以上群：5名）であった。「普通」「とても不満」と回答したのは5年未満群の各1名であった。

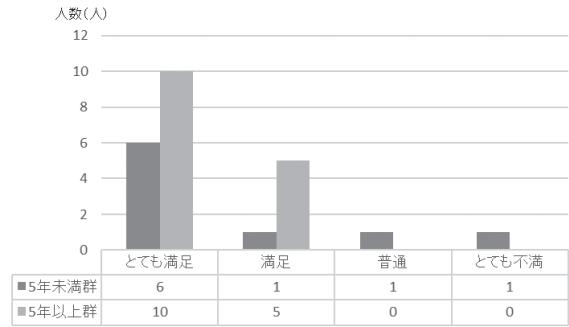


図1-8 プログラムの満足度

9) 要望 (図1-9)

講習会への要望では「もっと臨床的な講義を聴きたい」が9名（5年未満群：3名，5年以上群：6名），「もっと基礎的な講義を聞きたい」が2名（5年未満群：1名，5年以上群：1名），「時間が足りない」が3名（5年未満群：2名，5年以上群：1名），「最初から解剖する機会が欲しい」が5名（5年未満群：2名，5年以上群：3名），「さらに丁寧に説明してほしい」が2名（5年未満群：1名，5年以上群：1名）であった。また，「その他」では「基礎と解剖をつなげる講義や伝え方をさらに聞きたい（5年未満群）」「皮下組織や表層の筋を見る機会があるとさらに良いと思いました（5年以上群）」との記載が挙げられた。

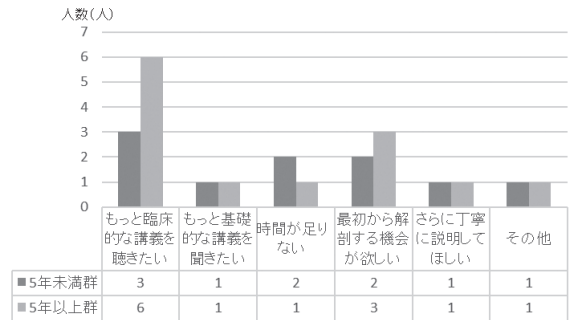


図1-9 講習会への要望

## 2. 解剖学見学実習の回答結果

リハビリテーション学科70名の参加者（作業療法学コース（以下、作業）：23名、理学療法学コース（以下、理学）：47名）および看護学部看護学科（以下、看護）48名の参加者から有効な回答が118名分集められた（回収率100%）。

### 1) 見学実習の必要性（実習前）（図2-1）

「大いに必要」が45名（作業：4名、理学：16名、看護：25名）、「必要」が65名（作業：16名、理学：29名、看護：20名）、「あまり必要としない」が8名（作業：3名、理学：2名、看護：3名）であった。また、「ほとんど必要としない」は0名であった。

### 2) 見学実習の必要性（実習後）（図2-1）

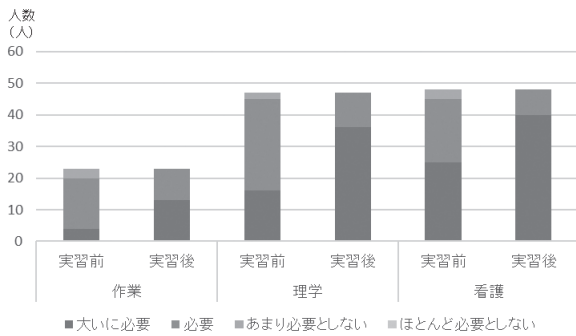


図2-1 見学実習の必要性（実習前後の変化）

### (2) 自由記述

リハビリテーション学科28名、看護学科19名から応答があり、「満足を選んだ理由」の文章から、記述された「語」を図2-3（リハビリテーション学科）、図2-4（看護学科）のように抽出した（テキストマイニング）。

リハビリテーション学科では、「実際（28名、42%）」が最も多く記述され、次いで「筋肉（23名、34%）」「教科書（14名、21%）」が続いた。一方で看護学科では、「理解（19名、44%）」が最も

「大いに必要」が89名（作業：13名、理学：36名、看護：40名）、「必要」が29名（作業：10名、理学：11名、看護：8名）であった。また、「あまり必要としない」および「ほとんど必要としない」は0名であった。

### 3) 実習についての満足度（5段階評価および自由記述「満足を選んだ理由」）

#### (1) 5段階評価（図2-2）

「とても満足」が68名（作業：11名、理学：25名、看護：32名）、「満足」が41名（作業：9名、理学：19名、看護：13名）、「普通」が7名（作業：2名、理学：3名、看護：2名）、「とても不満」が1名（看護）であった。

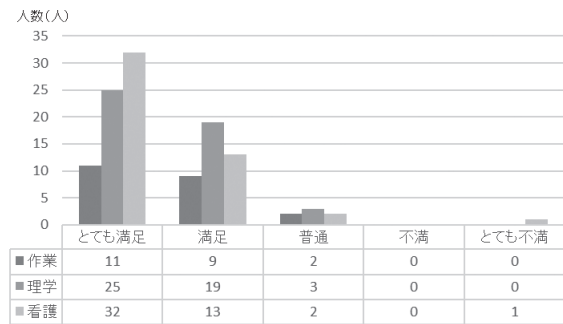


図2-2 見学実習の内容および課題の満足度

多く記述され、次いで「教科書（15名、35%）」「人体（12名、28%）」「臓器（10名、23%）」と続いた。

#### 4) 教員（指導法）への満足度（5段階評価、自由記述「不満の場合の理由」）

「とても満足」が74名（作業：14名、理学：30名、看護：35名）、「満足」が31名（作業：7名、理学：14名、看護：10名）、「普通」が8名（作業：2名、理学：3名、看護：3名）であった。また、「不満」「とても不満」は0名であった。

#### 5) 実習時間について（3段階評価）（図2-6）

28回答者 (42%) この質問に 実際回答しました。

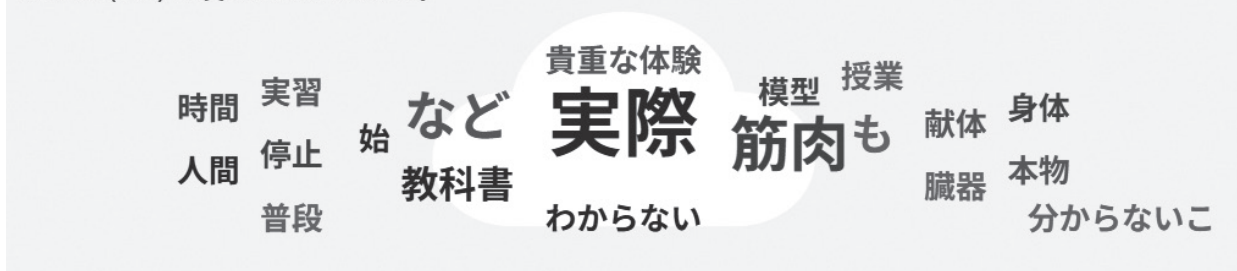


図2-3 実習についての満足度—自由記述からの抽出語（リハビリテーション学科）

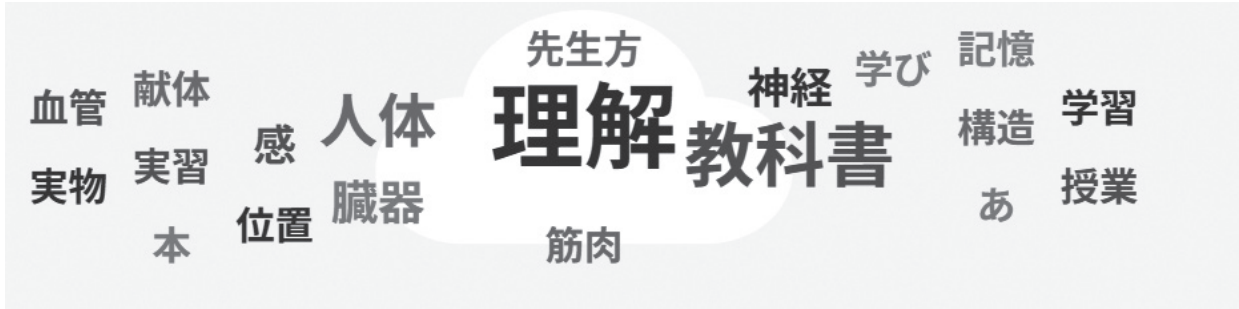


図2-4 実習についての満足度—自由記述からの抽出語（看護学科）

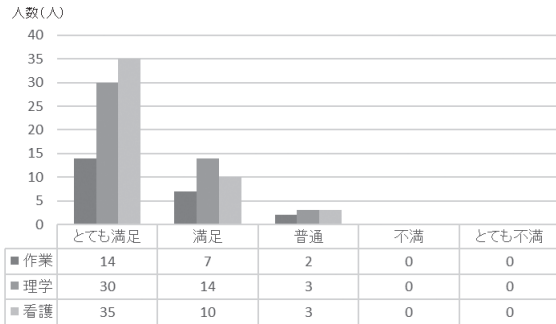


図2-5 教員の対応に関する満足度

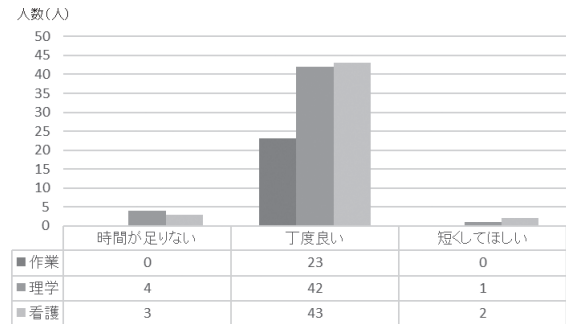


図2-6 実習時間について

「丁度良い」との回答が108名（作業：23名，理学：42名，看護：43名）と最も多く，「実習時間が足りない（長くしてほしい）」は7名（理学：4名，看護3名），「実習時間を短くしてほしい」は3名（理学：2名，看護：1名）であった。

6) 実習を通して最もよかったこと（自由記述）

リハビリテーション学科63名，看護学科43名

から応答があり，「実習を通して最もよかったこと」の文章から，記述された「語」を図2-7（リハビリテーション学科），図2-8（看護学科）のように抽出した（テキストマイニング）。また，多かった抽出語の人数と割合，及び自由記述の記述例を紹介する。



図2-7 実習を通して最も良かったこと—自由記述からの抽出語（リハビリテーション学科）



図2-8 実習を通して最も良かったこと—自由記述からの抽出語（看護学科）

リハビリテーション学科では、「筋肉 (34名, 49%)」が最も多く、「神経 (26名, 37%)」「実習 (24名, 34%)」「教科書 (24名, 34%)」が続いた。一方で看護学科では、「実習 (24名, 50%)」が最も多く、「理解 (21名, 44%)」「臓器 (21名, 44%)」「教科書 (16名, 33%)」がそれに続いた。以下は自由記述の例である。

- 今回の実習では、教科書や人体模型で見る筋肉や臓器とは違うリアルな実物を見て触ることにより頭の中がさらに整理された。また動脈と静脈の触感の違いなどもわかって楽しかった。(作業)
- 教科書や模型では分からない、実際の人体の構造や個体差を学べたことです。筋肉の付き方や神経の走行が想像以上に複雑でとても驚きました。また、尊厳を持って学ぶ姿勢を学ぶことができたことも良かったと思いました。(理学)
- 私は献体に触れることはできませんでしたが、献体を見ながら教科書と照らし合わせることで、筋肉や、神経、腱がどのようにしているのかなど詳しく知ることができました。特に手の筋肉の起始と停止、それぞれの筋がどのような動きをどの場所にさせているのか、似ている筋の見分け方、それぞれの筋の走行のしかたとその理由などを知ることができたのが一番良かったです。今回見させていただいた献体は筋や腱、神経の状態がよく、とても分かりやすかったです。(理学)
- 今回の実習で神経や筋、臓器を実際に自分の手で触れて確かめることができたため、教科書の解剖図を見るよりもさらに身近な観察を行うことができた。自分自身が良かったと感じたのは、実際に骨格標本なども同時に観察することで、骨と筋の位置を正確に観察できたことである。(看護)
- 講義や教科書で学んだことを実際に本物の人体で観察することができたこと。この実習での経験により臓器の位置関係や構造、他の器官との関係などを理解でき、人体の構造を解剖学的な視点からイメージできるようになった。また、実際に触ってみることで骨や筋、腱、神経、血

管などそれぞれの特徴が分かり、硬さや質感の違いが理解できた。(看護)

#### IV 考察

##### 1. 人体解剖学講習会の回答結果について

今年度の参加者は昨年度の15名<sup>7)</sup>に比べ、9名増加し24名となった。内訳は20代が最も多く17名(70.8%)、30代が4名(16.7%)、40代が1名(4.2%)、50代が2名(8.3%)であった。参加者の年代構成は、本学が開学22年目であり、卒業生が比較的若いことと関係が深い。また、臨床経験年数の分布(図1-1)は昨年度と大きな差は見られず<sup>7)</sup>、5年以上10年未満が10名と最も多かった。男女比については、女性の参加者が5名(20.8%)と年々増加傾向(2023年度は4名<sup>7)</sup>、2022年度は3名<sup>6)</sup>)にある。職種は、作業療法士が9名(40%)、理学療法士が15名(60%)で、昨年度とほぼ同じ比率であった<sup>7)</sup>。

人体標本を用いた講習会の必要性(図1-3)に関し、「大いに必要」だと感じている参加者が臨床経験に関わらず22名(91.6%)おり、残りの参加者も「必要」だと回答した。医学部を持つ他大学で「理学療法士のための卒後解剖学標本示説研修」が強い希望で実施されている<sup>2)</sup>ことから本講習会の必要性が高いことが示された。講習会参加の目的(図1-4)では両群で「基本的な運動器の構造」の理解が最も多く、5年以上群では「傷害に関連する運動器の構造」の理解も同数で最も多く選択された。また、両群ともに「基本的な」脈管・結合組織・臓器等の項目を選択する参加者が多く、5年以上群の参加者で「傷害に関連する」構造等を目的として挙げる傾向が見られた。臨床経験年数に関わらず本講習会では「基本的な」身体構造の理解を目的に参加している参加者が多く、特に運動器の構造の理解を目的にしていることが分かった。本講習会の参加者が作業療法士と理学療法士であり、見学実習の結果同様に筋肉などの運動器に関心が高いことが影響している可能性が高い。またこれらの結果は講習会の必要性の自由記述からの抽出語(図1-2)で多かった「触診(7人, 35%)」、「知識(5人, 25%)」、「解剖(4

人、20%）」とも関連していると推察された。

基礎コースは、臨床経験の少ない参加者の要望に答えるべく、2018年度講習会から設定された<sup>5)</sup>。今回「午前・午後ともに基礎コース」を選択した参加者は全体の41.6%で、臨床経験5年未満群の66.6%であった。臨床経験5年以上群の参加者でも本講習会参加5回未満の4名が「午前・午後ともに基礎コース」を選択していたことから、臨床経験年数に関わらずこの「基礎コース」のニーズがあり、今後も継続していく必要があることが示唆された。

本講習会の目的の達成度（図1-5）は、臨床経験5年以上群では9名（60%）が「80%以上」と回答し、5年未満群では「60%以上80%未満」を選択した参加者が6名/9名と最も多かった。また、5年以上群の80%、5年未満群の77.8%は「60%以上」目標を達成しており、参加者の多くがそれぞれに達成感は得られていたと考える。目的を達成できなかった理由（図1-6）に関しては両群ともに「準備すべき知識が足りなかった」が最も多く、「確認したい課題が多い」が次に多かった。この結果から、本講習会の参加者は事前に確認したい課題を準備して参加していることが伺えた。一方で「準備すべき知識が足りなかった」に関し、スタッフのフォローなどが必要である可能性が示唆された。

スタッフ対応への満足度（図1-7）、プログラムについての満足度（図1-8）ともに「とても満足」・「満足」が全体の91.6%となった。本講習会への参加経験（回）数は、昨年度<sup>7)</sup>と比較し、複数回参加している参加者が増加し、リピーターが増えていた。このリピーターの増加はスタッフ対応への満足度やプログラムについての満足度などが影響している可能性が示唆された。

これまでの調査で「もっと臨床的な講義を聴きたい」という本講習会への要望が常に多く聞かれた<sup>6), 7)</sup>。そこで今回は臨床と研究分野で活躍している卒業生に「心不全におけるフィジカルアセスメント」というタイトルで臨床的な講義を実施してもらった。しかし多くの参加者から「もっと臨床的な講義を聴きたい」という要望が多く聞かれ

たことから理想的には講習会に日程の延長も検討すべきであると考え。また、「最初から解剖する機会が欲しい」との要望もこれまで同様に多く聞かれた。人を対象とする医療者にとって当然の要望と思われるが、人体標本を使う解剖学実習については、わが国では死体解剖保存法<sup>8)</sup>により厳しく制限されているため現行の法律では困難である。今後の法整備に期待したい。

## 2. 解剖学見学実習の回答結果について

見学実習の前・後で、見学実習に対する必要性の高さの変化がみられた（図2-1）。見学実習後には「大いに必要」を選択した参加者が増加した（リハビリテーション学科：28.5%→70%、看護学科：52%→83.3%）。大和田ら（2018）は、実習後の調査で人体解剖学実習の必要性について「すごく感じる」と答えた割合が74%であったデータを示し、人体解剖学見学実習後に理学・作業療法の学生の学習意欲が高まったことを指摘した<sup>1)</sup>。今回の我々の調査により、看護学を含め保健・医療系の学生にとって、人体解剖学実習は重要な学習機会になっていることが確認された。

「見学実習についての満足度」（図2-2）では、全体の92.4%が「とても満足」・「満足」を選択し、ほとんどの参加者が満足感を得られた。「とても不満」を選択した参加者が1名（看護）でいたが、「不満を選んだ理由」に記載がなかったことから、回答は選択ミスや設問の解釈の誤りと考えた。

「満足を選んだ理由」の自由記述（図2-3、図2-4）では、リハビリテーション学科で、「実際（28名、42%）」、「筋肉（23名、34%）」、「教科書（14名、21%）」が多く、看護学科では、「理解（19名、44%）」、「教科書（15名、35%）」、「人体（12名、28%）」、「臓器（10名、23%）」が多くみられた。これらの学科による違いは、解剖学自体の学習内容の違い（リハビリテーション学科では模型を用いた運動器の学習機会があり、看護学科では1年次から臨床医学を学習する機会があるなど）が影響していると考えられる。また、看護学科学生を含む「パラメディカル」の学生ではその専門によって、興味を持つ人体構造に特徴があることが示唆

されている<sup>3)</sup>。この報告によると、看護学生は消化器、循環器に興味関心が高く、理学療法学・作業療法学の学生は筋骨格系に興味関心が高い<sup>3)</sup>。今回、調査対象は1年次の学生であったが、上記の報告に沿うものと考えられる。さらに、両学科ともに「教科書」の抽出語がみられ、実際の人体標本と教科書の差異に気付き、興味・関心を持った参加学生が多かったことを示唆している。

「教員（指導法）への満足度」（図2-5）では、全体の90%が「とても満足」・「満足」と回答した。また、「実習時間について」（図2-6）では、91.5%の参加者が「丁度良い」と回答していたため、現在の時間設定が適していると考えられる。

「実習を通して最も良かったこと」の自由記述（図2-7、図2-8）では、前述の「満足の理由」でみられた語と共通するもの（「筋肉」、「教科書」、「理解」、「臓器」）が多かった。また、リハビリテーション学科では、「神経（26名、37%）」や「実習（24名、34%）」といった語も抽出され、看護学科では、「実際（24名、50%）」といった語も多く抽出された。今回の「実習」で「実際」に献体を観察することで、「教科書」や模型では分からない個体差などを学べ、「筋」や「神経」の走行や「臓器」の構造の「理解」できたとの満足感が参加学生の文章から伝わった。

## V. おわりに

卒業生を対象とした卒業研修の一つである「医療専門家のための人体解剖学講習会」は、これまでも高い要望があった。今回の講習会参加者は、リピーターも多く講習会の満足度も概ね満足してもらえたようである。昨年度までの調査結果と合わせ、今後の講習会の内容に反映し、新規参加者も獲得していきたい。

学部学生を対象とする「人体解剖見学実習」では、初めて実物の人体を観察すること機会であり、教科書や模型では学べない構造や個体差などを学ぶことができる貴重な機会になっていると思われる。また、ご遺体への感謝や死生観、医療に携わる人間としての倫理観を養うこともでき、保健・医療系学生にとって今後も継続していく意義は大きい

と感じた。学生の専攻によっても教育方針や学生の興味・関心に違いがあることも示唆されたので、人体解剖見学実習が持ついろいろな側面からの学習効果を理解した上で実習を進めていきたい。

## VI 参考文献

- 1) 大和田宏美, 山口志津枝, 大友篤, 村上賢治, 鈴木裕治: 理学療法・作業療法学生に対する人体解剖見学実習の導入に伴う教育効果について. 研究紀要青葉Seiyo9(2), 69-75, 2018.
- 2) 澤口朗, 豊嶋典世, 日野真一郎, 高橋伸育: 理学療法士の技術力向上を目的とした卒業解剖学標本示説研修の新たな展開. 理学療法学Vol.38(8), 576-577, 2011.
- 3) Sakamoto N, Miyaso H, Komiyama M, Sugata Y, Mori C, Shimizu E, Matsuno Y.: Differences in the interest in human body structures among paramedics from various specialized fields: Development of an effective anatomical instructions. 形態・機能, 20, 19-32, 2021.
- 4) 坂本宏史, 志茂聡, 関口賢人, 成昌燮, 川手豊子: 医療従事者における「人体標本を用いた実習」についての調査報告（2017年度）臨床経験年数の長短によるニーズの違い. 健康科学大学紀要, 14, 95-111, 2018.
- 5) 坂本宏史, 志茂聡, 関口賢人, 成昌燮, 川手豊子: 医療従事者における「人体標本を用いた実習」についての調査報告（2018年度）—臨床経験年数の長短によるニーズの違い—. 健康科学大学紀要, 15, 93-104, 2019.
- 6) 坂本宏史, 大塚篤也, 小川麻里子, 関口賢人, 成昌燮, 志茂聡: 「人体標本を用いた解剖学実習」についての調査報告（2022年度）. 健康科学大学紀要, 20, 11-22, 2024.
- 7) 坂本宏史, 大塚篤也, 小川麻里子, 関口賢人, 成昌燮, 志茂聡: 「人体標本を用いた解剖学実習」についての調査報告（2023年度）. 健康科学大学紀要, 21, 35-45, 2025.
- 8) 死体解剖保存法, [https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=80153000&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=80153000&dataType=0&pageNo=1) (2025年10月28日)
- 9) 志茂聡, 坂本祐太, 藤田愛, 坂本宏史: 解剖見学実習の有用性. リハビリテーション教育研究, 26, 84-89, 2020.
- 10) 三木喜美子, 佐野宏一朗, 乙黒仁美, 高村かおり, 竹村眞理: 看護基礎教育における解剖見学実習のあり方についての検討—解剖見学実習に関する文献から見る今日の動向から—. 健康科学大学紀要, 15, 79-83, 2019.